

嵐
龍

殺人衝動

2

死刑執行人の暴走

あらわし

中学二年生の颶間 風は『殺人衝動』といつ悩みを抱えながら平凡な日常を暮していた。

ある日、クラスメイトの女生徒が男達に絡まれている現場を目撃する。風は殺人衝動により理性を失いかけたためその場から立ち去った。次の日、怪しい手紙を受け取る。手紙を開くと「お前を見てやのや」と書いてあり自分と殺人現場が移つている写真が同封されていた。その後、男達に絡まっていた女生徒から「どうしてあんな事したの?」と聞かれ、男たちが死体となつて発見されたことを知る。

主人公は自宅に帰り、届いた不審な荷物から日本刀と拳銃を手に入れる。その日の夜、主人公は殺された男たちの仲間を獵奇的に殺害し、手紙の指示に従い故郷の国から逃亡した。

前作のURL

<https://www.dropbox.com/sh/6o6x4476vyhyx30/AABW5xj7TKQHrutwPkwjXGNa/%E6%AE%BA%E4%BA%BA%E8%A1%9D%E5%8B%95%EF%BD%9E%AD%BB%E5%88%91%E5%9F%B7%E8%A1%8C%E4%BA%BA%E3%81%AE%E8%A7%A3%E6%94%BE%EF%BD%9E.pdf?dl=0>



第一章 帰還

逃亡して数年が経った。

まさか、故郷に帰つてくるなんて夢にも思わなかつた。
タンカーの貨物室の隅で、俺は仰向けに寝て物思いに耽つていた。

4、5年前…正確には数えていないが、同じようにタンカーに乗つて故郷を離れたことを覚えている。その後の事はあまり覚えていないが、色々な戦場を連れ回され、訓練を受け、戦つた。ただ命令書通りに人を殺す。何も考えず、ただ指示されるがまま殺した。非情で残酷な行動が許される世界だつた。平和な故郷とは、まるで別世界だつた。

自分が行つてきたことが正しいとは思わない。人を殺しても正気でいられるのか不思議なくらいだ。人をただの“モノ”としか思えない。殺した人間の人生なんて知らないし、気にしない。そいつが死んで悲しむ家族や友人なんて知らない。動く肉の塊としか思つていらないのだろう。だから無心で人を殺せる。

戦場で戦つている間も殺人衝動は湧いてきた。ただ、昔のように暴走することは無くなつた。抑える必要が無くなつたからだろう。しかし、未だ殺人衝動が湧き起ころう理由はわからないままだ。予想ではたぶん自分には足りないのだろう。理解できないのだろう。愛というものが。

愛といえば、戦場で戦つた時に一人の変人と出会つた。普段は一人で任務に就くが、その時は珍しくバディを組んだ。

バディとは口を利かなかつたが、そいつも同じく口を利かなかつた。だが、そいつも武器と会話していた。愛用のライフルに女の名前で語りかけていた。第一印象はただの変人だつた。しかし、戦場での戦いは一流だつた。まるで武器と意思疎通をし、呼吸の合つた戦い方だつた。それが愛の力ならば、そいつに敵わなかつた理由は俺に愛がなかつたからだろう。

俺も武器に愛着が湧くかと思つたが、そうでもなかつた。故郷を出る前から持つていた刀は未だ手放さなかつたが、名前を付けたり話しかけたりはしていない。当たり前か。

そんなことを考えていると船が停止した。そろそろ港に着く時間だ。

久しぶりの故郷だが、やはり故郷に対する愛着も感じなかつた。

第二章 暴走

故郷は相変わらず平和だつた。自分が居た戦場が嘘のようだ。人々は忙しく働き、遊び、銃声なんて無縁の世界だつた。

一つ変わつた事といえば、国民が戦争反対を叫ぶデモが目立つていて事ぐらいだらうか。どうやら、政府が戦争と関わる法律を変えようとして、国民がそれに反対しているらしかつた。俺からしてみれば、十分平和だつた。罵声の代わりに火炎瓶が飛んでこないだけマシだ。まあ、この騒ぎが故郷へ帰つてくる理由なのだが。

今回の任務は、この国のトップの暗殺だ。イベントに出席するターゲットを狙撃する。後は国外に逃走するだけ。依頼主はこの騒動をよく思つていないうらしい。トップが消えれば、怖気づいて法改正をしないだらうというのが魂胆らしい。俺には関係ない話だが。もうこの国人間ではない。

狙撃ポイントも任務に必要な物資もすべて揃つていて。遂行手順もすでに用意されている。俺はいつも通り、無心に任務を行つただ。決行は明日の昼、イベントに出席するターゲットが大衆の前で演説するため壇上に上がつた瞬間を狙撃する。その後、攪乱用の爆弾を爆発させ国外に逃走する。今までの任務の中でも、非常にシンプルな任務だ。いつもであれば拠点を壊滅させる。だが、今回の任務は今まで以上に重要だ。俺が放つた一発で国ひとつが未来が変わる。どう変わるかは知る由もないが。

俺は狙撃ポイントの寝袋で眠りについた。明日、自分の国が変わることを知らない国民のように。

■ ■ ■

ピッタリ起床予定時刻に起きた。日頃の訓練の賜物だ。軽く軽食を取り、狙撃ポイントでライフルを構えた。

イベントは大通りで行われ、多くの人々が集まっている。天気は快晴。壇上までの見通しも良好。風も穏やかだ。

あと数秒でこの国は変わる。そこには何の感情もない。ただ ターゲット 的を撃ちねば良いだけ。簡単なことだ。

スコープからターゲットが壇上に上がるのが見える。俺は引き金に指をかけた。残るは引き金を絞るだけ。そこに感情はなく、意思もない。愛国心も慈悲もない。無感情。無関心。それでいいのか？

「……！？」

頭の中で声が響いた。何処か懐かしいあの声が。

（オマエの意思はないのか？）

「……やめろ」

（オマエに野望はないのか？）

（……うるさい！）

二ノ田惣左衛門 二ノ田惣左衛門 二ノ田惣左衛門 二ノ田惣左衛門
二ノ田惣左衛門 二ノ田惣左衛門 二ノ田惣左衛門 二ノ田惣左衛門 二ノ田惣左衛門
二ノ田惣左衛門 二ノ田惣左衛門 二ノ田惣左衛門 二ノ田惣左衛門 二ノ田惣左衛門
二ノ田惣左衛門 二ノ田惣左衛門 二ノ田惣左衛門 二ノ田惣左衛門 二ノ田惣左衛門

「ウルセエエエエツ!!」

俺は引き金を引いた。ターゲットに銃口を向けたまま。

遠くから悲鳴が聞こえた。大衆が世界の変化を悟ったように。恐怖と悲しみの叫びがここまで響いてくる。国のトップたちも慌てふためいている。何が起こったか認めたくないかのように、目の前の出来事を理解したくもないかのように。

“ターゲットも含めて”遠くの惨状を呆然と見ていた。この国の主義の象徴でもある『話し合いの場』が爆発とともに煙を上げ崩れていく様を。国家が崩れていく様を。ただ呆然と……

俺は、その光景を眺めていた。この惨事は指示に含まれていない。ターゲットも死んでいない。俺は確かに引き金を引いた。『国家を壊滅させる引き金』である“爆弾のスイッチ”を。

「作戦成功。」

そう言つた俺の顔は笑つていた。

■ ■ ■

実戦経験を積んでいた時、俺は「死刑執行人」、「嵐 龍」と呼ばれ恐れられていた。相手を殺す様は、微笑む骸骨の死神というよりむしろ無慈悲に無表情に無感情に罪人を葬る死刑執行人だった。敵陣を縦横無尽に走り、相手の後ろから鎌首をもたげて食いちぎる。俺の通った痕は、嵐が過ぎ去った後のようだつた。

俺は人を殺したかった。それが叶つた。だが、なぜこんなにも満たされず、空虚なのか。満たされるためにはどうすれば良い?殺したりないのか?もつと多くの人間を殺せば良いのか?

“フフフツ”

“もしかしてお困り?”

久しぶりに心の奥底が疼く。

“答えを教えましょーか?”

■ ■ ■

まだ崩れていく音と人々の悲鳴が聞こえてくる。外は大ハニックだ。警察や軍が動き出すのも時間の問題だが、今いる場所がすぐにばれることはない。だが、逃げるなら早く動かなければ。俺は任務を失敗した。もうサポートは受けられないだろう。

しかし、俺はその場から動けなかつた。まだ興奮が冷めなかつた。ようやく思い出せたのだ。自分の意思も野望も存在理由も。俺の殺したかつた相手をようやく思い出せた。俺が求めていたものはこれだ。

“なぜ殺さなかつたの？”

いつも頭に響く“あの”声が聞こえた。

“教えて？なぜ殺さなかつたの？”

声が響く。

“ねえ？なんで？”

心を揺すぶる“あの”声が聞こえてくる。

“教えて！なぜ殺さなかつた？”

後ろから

第三章 解答

俺の後ろにあの時の少女が立っていた。まだこの国を去る前に同じ学校のクラスメイトだった女子だ。俺がこの国を去るきっかけになつた子だ。

「なぜ君がここに？」

“それは分かつてるでしょ？なぜ殺さなかつたの？”

僕の問いかけに、彼女は苛立つた口調で答えた。

“私は言つたはず。もっと殺せつて。なのに何で？”

“なのに何で一人も殺さなかつたの？”

「それは思い出したから。自分の意思を。」

「意思？それは人を殺すことでしょう？殺人こそがあなたの意思でしょう？」

「違う。」

“ だつたらなぜ今まで人を殺してきたの？それが意思でないとしたら何なの？”

「それは君がよく知っているはずだよ？」

“ 私？私は何も知らないわよ。知らないから聞いてるんじゃない？”

「そうちつた：君にはなかつたな。意思とか野望とか存在理由とか。君はただ単に存在しているだけだつた…」

「そうちつた：彼女は意思もなく野望もなく存在理由もない。
人間ではない。」

「名前は…」

「…運命やへ」

To be continued...

原稿の続き落としました。

by 作者

あとがき

締切に間に合いませんでした。ごめんなさい。（泣）

今作は、前作「殺人衝動／死刑執行人の解放／」の続きとなります。前作の伏線を回収しようと思いましたが、今回はさらに伏線が増えて訳が分からぬ2巻だった思います。これまでの伏線は3巻でまとめて回収しようと思っていますので、来年頑張って書きます！

★この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件などには、いっさい関係ありません。

本書の一部あるいは全部を、著作権者の承諾なく、転載、複写、複製、公衆通信(放送、有線放送、インターネットへのアップロード)、翻訳、翻案などを行うことは、著作権法上の例外を除き、法律で禁じられています。